

# 長根窯跡群

III

昭和51年3月

涌谷町教育委員会

## 序

昭和45年12月、町道小里長根線道路工事中に8世紀はじめのものと推定される須恵器の窯跡を発見いたしました。この遺跡は全国遺跡台帳にも記載されていないものであり、宮城県古川高等学校教諭佐々木茂楨氏に依頼し調査を行った結果、東北古代史の解明に極めて重要な遺跡であることが判明いたしました。

涌谷町教育委員会は、この遺跡のもつ歴史的意義を明らかにするため、宮城県多賀城跡調査研究所長岡田茂弘氏に調査の指導を依頼し、宮城県古川高等学校教諭佐々木茂楨氏および宮城県多賀城跡調査研究所技師桑原滋郎氏を担当者として、46年8月、48年5月に発掘調査を実施いたしました。その調査結果につきましては既に、調査報告書「長根窯跡」「長根窯跡群II」「長根窯跡群緊急調査概報」として、学界に報告されておりますが、この度、宮城県多賀城跡調査研究所研究員桑原滋郎氏および東北大大学院社説人氏のお手を煩わし、発掘調査報告書「長根窯跡群III」として、その調査の成果を集成し、発表することにいたしました。学術資料として、広く御活用いただければ幸いと存じます。

尚、本報告書を発行するにあたり、御多忙の中、御援助をいただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

昭和51年3月

涌谷町教育委員会

教育長 百々六郎

# 宮城県遠田郡涌谷町小里 長根窯跡調査報告書

桑原滋郎  
辻秀人

## 目 次

序文	涌谷町教育委員会教育長	百々六郎
I	窯跡群の位置	1
II	調査経過	1
III	発見遺構	4
(1)	A-3号窯跡	4
(2)	A-5号窯跡	7
(3)	A-6号窯跡	7
(4)	その他	8
IV	出土遺物	9
(1)	3号窯	10
(2)	5号窯上層	10
(3)	5号窯下層	11
(4)	6号窯	13
(5)	土壙	13
V	考察	17
(1)	遺構について	17
(2)	出土遺物について	18
(3)	長根窯跡群A地点の性格	19

本稿の執筆は、I, II, III, V(1)を桑原がIV, V(2)-(3)を辻が行ったものである。

## I 窯跡群の位置

長根窯跡群は、宮城県の北部、遠田郡涌谷町小里字長根南の地内に存在する。涌谷町には、世に名高い天平産金遺跡（涌谷町黄金追：黄金山神社）がある。県道仙台一氣仙沼線を通って、麓根丘陵南麓にある天平産金遺跡をみてさらに北上し、丘陵をこえてその北麓にある小里部落にいたると、眼前1.2kmほど北方に東西5km、山約400mの細長い長根丘陵を望むことができる。この長根丘陵は、遠田郡山尻町の大貫丘陵から派生した小丘陵で、砂礫ないし粘土を主体とした新第三紀鮮新世の地層で構成されており、丘陵の標高は20m前後である。長根窯跡群は、この長根丘陵の南斜面にある（第1図・第2図）。

## II 調査経過

涌谷町の長根丘陵に窯跡群が存在することは、昭和45年12月に、町当局が例道改良工事を施工した際に、ブルドーザーが窯跡を破壊し、多量の須恵器が偶然発見されたことにより、はじめて世に知られた。その折採集された須恵器は、翌46年2月『宮城県遠田郡涌谷町小里長根窯跡』（涌谷町教育委員会発刊）として学界に報告された（註1）。8世紀の初頭にこの地において、須恵器の生産があったことは、従来まったく予想されていなかっただけに、学界からも注目されるところとなつた。

その後、佐々木茂楨氏や、多賀城跡調査研究所が中心となって分布調査を行ったところ、長根丘陵には、A～Gの7地点に窯跡のあることが明らかとなり、大きな窯跡群であることが知られるにいたつた。そこで昭和46年8月に、長根窯跡群発見の端緒となったA地点1号窯と、保存のあやぶまれる、B地点1号窯、C地点1号窯の発掘調査を実施した。その結果は『長根窯跡群II』（昭和47年3月、涌谷町教育委員会発刊）として報告されている（註2）。

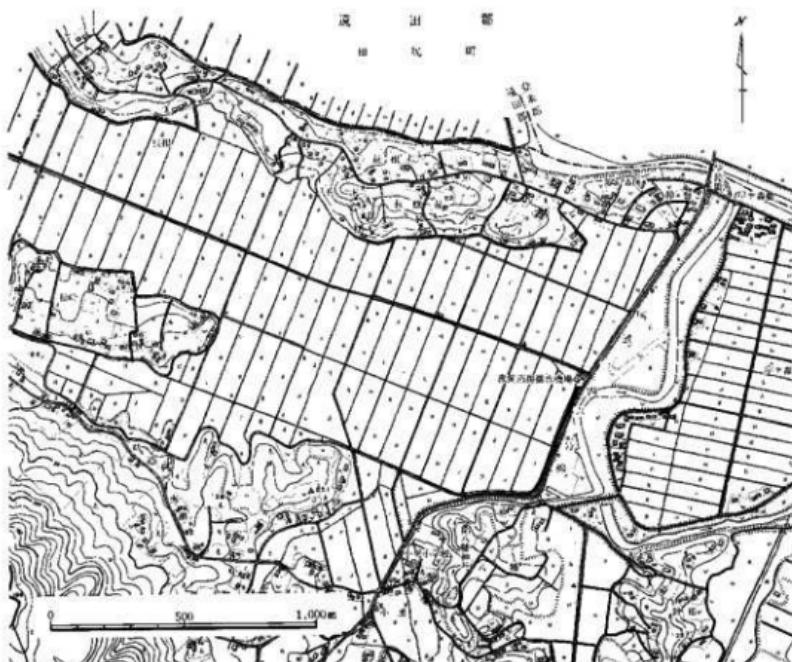


第1図 宮城県北部の古代窯跡

1. 長根窯跡群
2. 小戸窯跡群
3. 大吉山窯跡群
4. 日の出山窯跡群
5. 春日大沢窯跡群
6. 台の原・小出屋窯跡群

発掘調査と分布調査の結果から、長根丘陵では、8世紀初頭から10世紀以降まで、須恵器の生産が継続的に行われていたことが明らかとなったのである。

ところが、昭和48年5月半ばに、A地点1号窯の東に接する地（涌谷町小里字長根南87の1）を地主の大友近氏が、宅地造成のため、ブルドーザーなどによる整地工事を行ったところ数基の窯跡が発見された。5月16日町教委では、早速現場を確認のうえ、宮城県教育委員会文化財保護課に連絡をした。文化財保護課はその日のうちに佐々木茂樹技術主査を派遣し、現場を実見したうえ、地主の大友近氏と交渉したところ、17・18日の両日、工事を休止し、調査を行うことに大友氏の同意を得た。そこで、文化財保護課は、多賀城跡調査研究所に緊急調査を要請した。それをうけて研究所では17・18日の両日、あわただしく調査を実施した。調査組織は下記のとおりである。



第2図 長根窯跡群地形図

調査主体：宮城県教育委員会・涌谷町教育委員会

調査員：岡田茂弘、桑原滋郎、鎌田俊昭、古泉弘（宮城県多賀城跡調査研究所）

調査協力者：大友近（地主）

両日の緊急調査は、上述したように宅地造成のために破壊されことになったA群の一部に対して行なわれた。A群のなかでA-1号窯は、昭和46年8月に調査されている。今回調査の対象とした地は、A-1号窯の東側にある部分である。

七地造成のために削平された約800m<sup>2</sup>の地域には、5基の窯跡が並んでいることが認められた。しかし、このうちA-2号窯、A-4号窯は、調査着手前に工事のため完全に消滅してしまった。両日の調査では、A-3号、A-5号の両窯を対象とした。ところでA-5号窯のさらに東側に接して、工事のために煙道のみが露出されてはいるが、ほぼ完全に本来の姿をとどめているとみられるA-6号窯が存在した。この6号窯をも含めて発掘調査することは時間的にも不可能であったので、これの発掘は3・5号窯の調査とは切り離して、後日改めて実施することとした。

A-6号窯に対する発掘調査は、昭和48年6月24日から30日にかけて実施した。調査組織は下記のとおりである。

調査主体：宮城県教育委員会・涌谷町教育委員会

調査担当者：志間泰治・佐々木茂楨（宮城県教育庁文化財保護課）

岡田茂弘・桑原滋郎（宮城県多賀城跡調査研究所）

調査員：古泉弘・鎌田俊昭（宮城県多賀城跡調査研究所）

調査協力者：高橋勇治・山田稔・新沼秀二・門馬真一郎・尖戸宏和（東北学院大学学生）

大友力衛・大友卓夫（地主）

なお、発掘調査は、時間的制約のため、窯跡本体についてのみおこない、灰原等附属する施設の調査は残念ながら実施することができなかった。

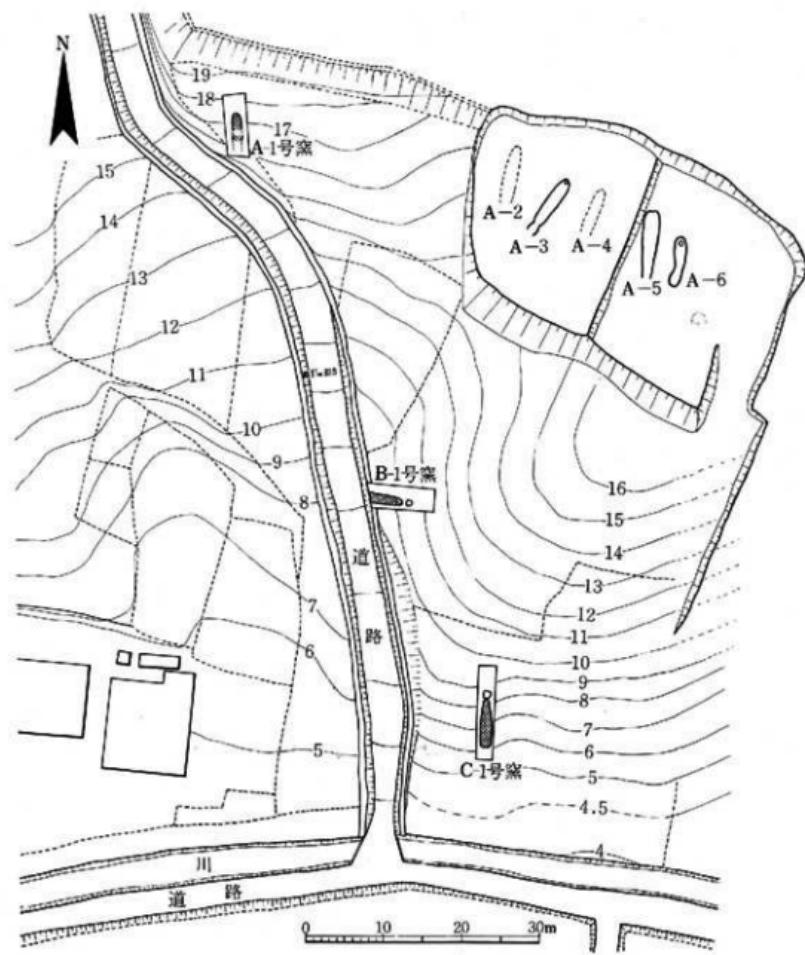
註1 佐々木茂楨・桑原滋郎「宮城県遠田郡涌谷町小里 長根窯跡」涌谷町教育委員会 昭和46年2月

註2 岡田茂弘・佐々木茂楨・桑原滋郎「長根窯跡群Ⅱ」涌谷町教育委員会 昭和47年3月

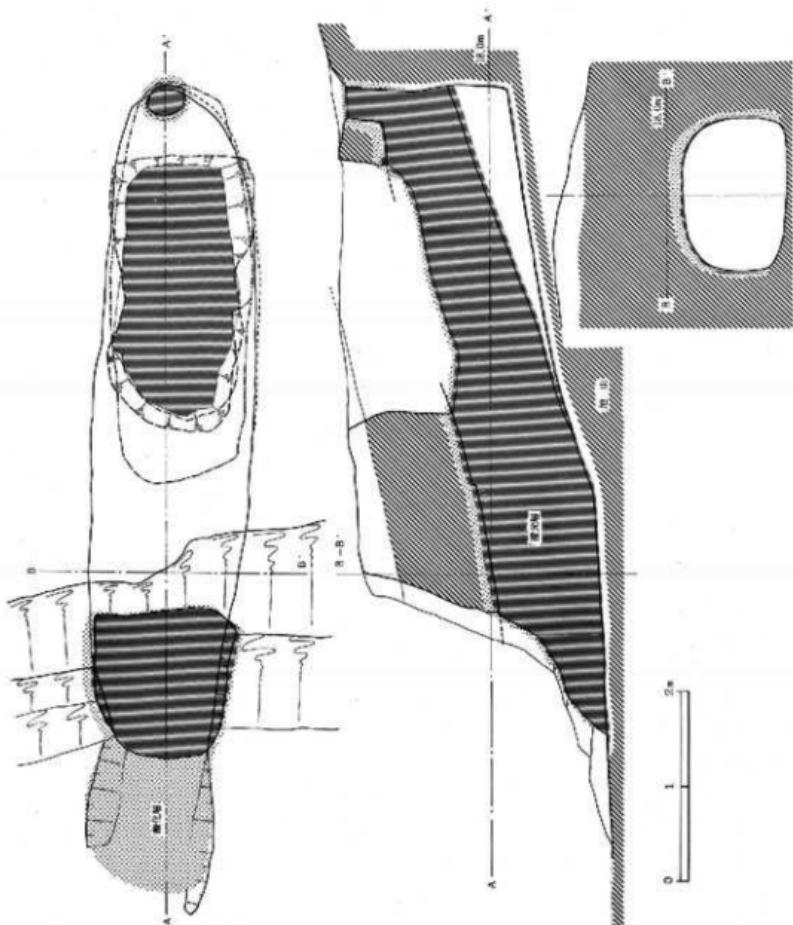
### III 発見遺構

#### (1) A-3号窯跡 (図版1 第4図)

今回発見された窯跡の中では最も西に位置している。窯体は黄褐色ローム質土層中に掘



第3図 発掘調査地区地形実測図



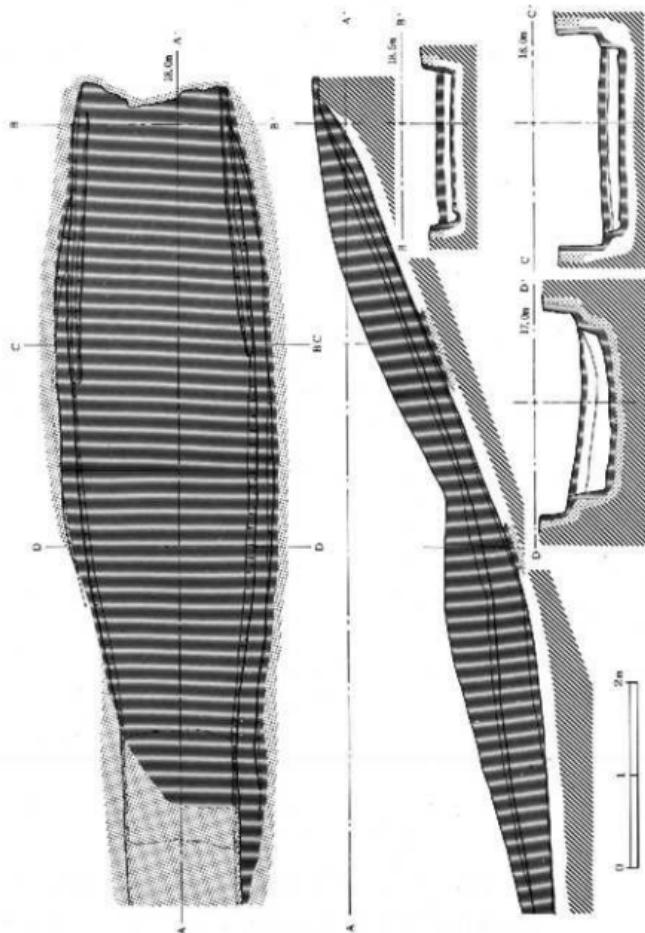
第4図 A地点 3号窯跡実測図

り込まれたいわゆる地下式窯の形態をとっている。焼成部の天井の北半部、燃焼部、および焚口は崩壊しているが、焼成部の南半部の天井および煙りだし部を含めて、他の部分は良好に遺存している。燃焼部はすでにほとんど工事のために破壊されており、わずかに焼成部の前方に地山が赤褐色に酸化した部分と粉末状の炭片が残っており、燃焼部と知ら

れるにすぎない。

焼成部は長さ約7m、巾約1.6mであり、窯床は一度補修されている。煙道部の下では、第1次床面のうえに約50cmの黄褐色ローム質土が堆積しており、その上に第2次窯床が形成されている。ローム質土の堆積は、焼成部の奥の部分の天井の一部分が崩壊した結果と

考えられる。床面の傾斜は下層が約12度、上層はそれより傾斜が急で約20度である。奥壁はほぼ垂直に立ち上っており、やや西に偏して煙道がつくれられている。煙り出しは直徑約36cmであり、垂直に立ちあがっている。



第5図 A地点 5号窯跡実測図

### (2) A-5号窯 (図版2 第5図)

5号窯はA-3号窯から消滅してしまったA-4号窯をへだてて、東約13.5mのところに位置している。A-3号窯同様地下式の窯である。天井および窯壁の上半は、工事以前に崩壊していたと思われるが、奥壁および煙り出しは、工事のため破壊されたものである。

燃焼部は巾約1.2m、長さ約2mほど残存しており、床面および壁面は赤褐色に酸化しつつ床面には木炭が散布している。床面にはほとんど傾斜がなく、水平に近い。焼成部は長さ約7m残存している。先にも述べたように奥壁、煙り出しは工事により削平されているので、焼成部はさらに長かったものと推定される。巾は上方で1.6m、中ほどで2m近く、比較的大きな規模をもっている。上半部の床面の壁にそって、巾20cm、深さ5cmの溝がみとめられる。壁は強い火をうけて還元されたとみられ、青灰色を呈している。

焼成部は後に改修をうけている。第2次床面は、第1次のそれの30cm~40cm上につくられており、巾は両側に各々20cmぐらいづつ拡げられている。従って巾は広い箇所では2.4mに達する。おそらく先の窯壁の一部が崩落したため、窯体の巾をほりひろげ、形態をととのえたものであろう。床面の傾斜は第1次、第2次とも20度前後である。

### (3) A-6号窯跡 (図版2・3 第6図)

A-5号窯の東約4.5mの位置にある。3・5号窯を調査した際に、煙り出しの部分が露出し、内部は空洞となっていたため、窯体がまったく完全な形で姿をとどめている可能性が考えられた。しかし、発掘の結果焼成部の前半部と燃焼部の天井は、工事前にすでに崩落していたことが明らかになった。加えて、良好に残存していた焼成部の奥の部分と煙りだしの部分も、3・5号窯の調査後、さらに続いたブルドーザー、ダンプカーなどの整地工事のため、地盤がゆるみ、発掘時には全体的に崩落していた。

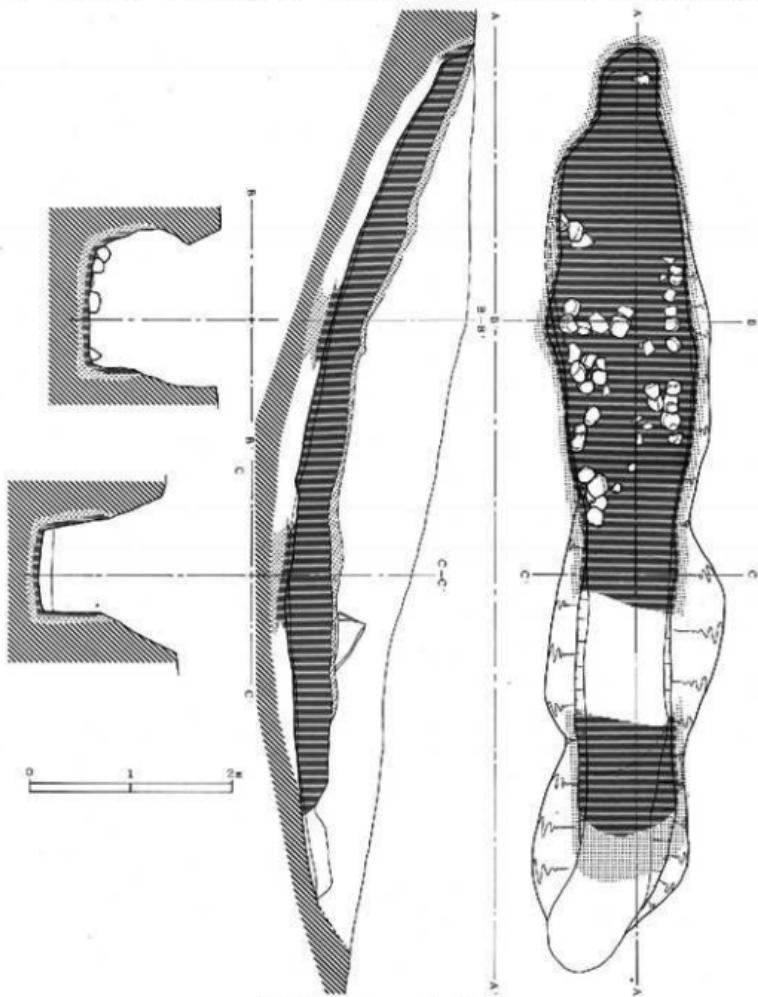
6号窯も地下式の窯であることは前二者と変わらない。燃焼部は長さ1.7m、巾0.9mほどで、天井部を除くとほぼ完全に残存していた。床面および壁面は、赤褐色に酸化し、床面には焼けた木材が散布している。床面は2層あり、下層はほぼ水平に近く、上層は手前がややあがっている。燃焼部の前方には長さ1.9mほどの灰などのかき出し部がみとめられる。

焼成部は長さ約5m、最大巾はほぼ中央辺で1.4mほどである。床面の傾斜は18度前後である。床面には、人頭大かそれよりやや小さな、スサの入った粘土のかたまりが30個ほど置かれており、それが青灰色に還元している。(同様なもの的小片が5号窯でもわずかにみとめられた。)焼き台に用いられたと考えられる。床面や壁面は還元して青灰色を呈して

いる。焼成部の床面には重複はない。

(4) その他 (図版2下)

A-1号窯とA-3号窯の間にA-2号窯が、またA-3号窯とA-5号窯の間にA-



第6図 A地点 6号窯跡実測図

4号窯が存在したと思われるが、工事中に完全に削平されてしまった。またA-3号窯の煙道部の北側に、径1m前後の土壠があり、焼け土、木炭片などとともに大型の甕が数個体分出土した。性格は不明である。

またA-6号窯の燃焼部の東側に、東西約1.8m、南北1.7mほどの二等辺三角形状に掘りくぼめた遺構が検出された。南に傾斜する斜面の旧表土から掘りこまれており、北側で約20cm位の深さをもち、南にゆくに従って浅くなっている。床面や壁面は酸化して赤褐色を呈しており、内部には焼けた木片、焼け土、土師器の小破片が散布している。どういった性格の遺構であるかわからない。

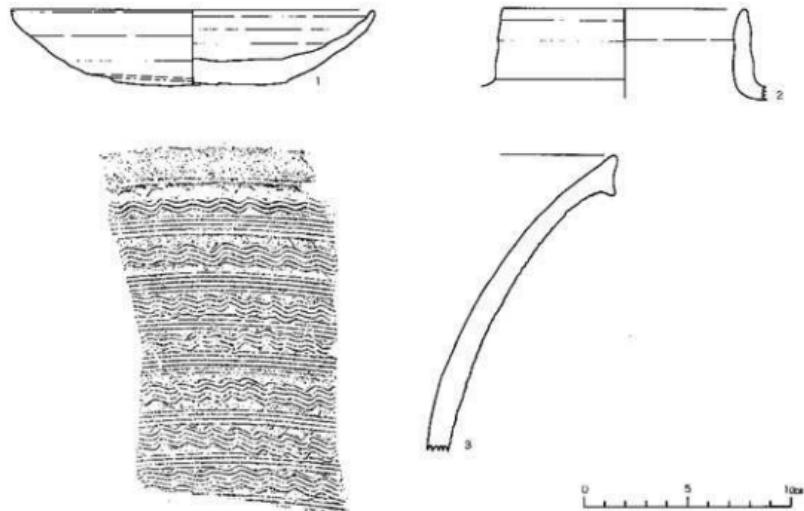
なお、A-6号窯の燃焼部上層にも類似の遺構が認められた。

## IV 出 土 遺 物

### (1) 3号窯

皿(図版4-4 第7図1)

口径17.5cm、器高3.7cm、底径9.7cmである。焼成は良好で、灰色を呈する。体部は底部からごくゆるやかに立ちあがり、わずかに内湾しながら外上方にのびて口縁部に至る。口縁部は仕上げの段階でやや強いロクロナデが加えられて、やや器厚が減じ、小さく内側に



第7図 3号窯出土須恵器実測図

屈曲して丸く収まる。体部は口径に比して浅い。底部は平底である。体部と底部の境界はヘラ切りによって作り出されている。ロクロ目はあまり顯著ではない。体部下端にはごく浅い手持ちヘラケズリが見られるが、あまり明瞭ではなく、器形には影響していない。底部に再調整は見られず、ラセン状のヘラ切り痕跡が明瞭に残っている。底部内面にはロクロ調整の後に行った不定方向のナデが見られる(註1)。体下部に焼成の後で穴が穿たれている。全体に粗雑な作りである。なお、実測図の一点破線はヘラ切り痕跡を表わしている。

#### 短頸壺(第7図2)

口頸部の破片であり、全形はわからない。焼成は良好で、灰色を呈す。口径は11.7cmである。頸部は体部から真上に立ちあがり、直線的に上方にのびて口縁部に至る。口縁部は器厚を減じて丸く収まる。器面は内外共にロクロ調整されている。外面の頸下部から体部にかけて灰が付着している。

#### 壺(第7図3)

全形の把握できるものはない。口頸部破片は1点出土している(第7図3)。頸部は単調に外反しつつのびて口縁部に毛り、口縁部は上下につまみ出されて断面三角形状を呈する。頸部外面には残存部分だけで7段の波状文が描かれている。波状文は數本の平行沈線によって区画し、その中に描いたものである。波長はほぼ均等で、波の向きがすべて左に偏している。この他にも同様な波状文と平行沈線が描かれた頸部破片が出土している。体部破片は多数出土している。タタキは平行線と格子目の2種類がある。あて道具はすべて円弧状文を刻んだものである。あて道具痕跡はナデによってすり消されている場合もある。

3号窯からは以上に他に杯、長頸瓶の破片が出土している。

#### (2) 5号窯上層

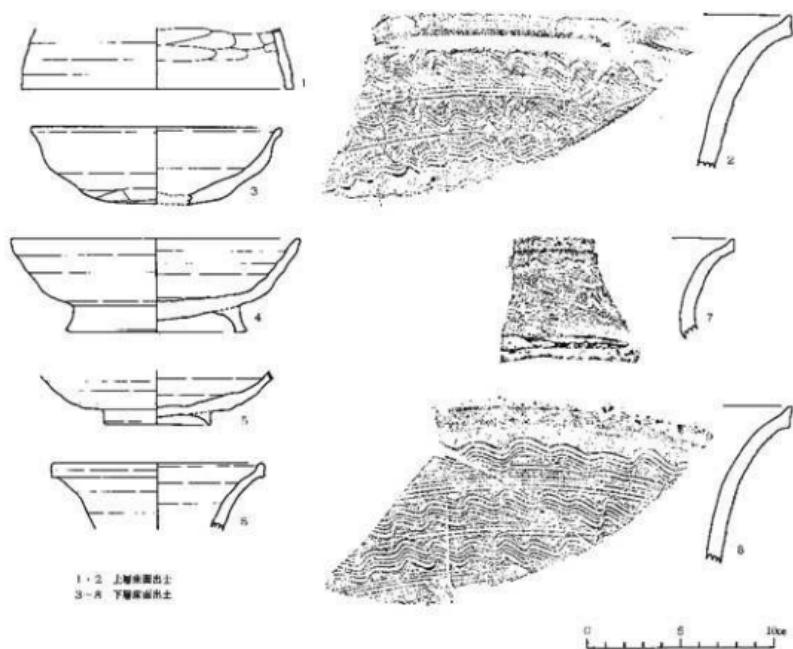
出土品は大部分が壺の破片であり、全形の判明したものはない。

##### 壺

口頸部破片は1点出土している(第8図2)。頸部は単調に外反して口縁部に至る。口縁部は上下につまみ出されて断面三角形状を呈す。頸部には數本の平行沈線によって区画された中に均等で波の向きが左に偏する波状文が描かれている。なお、この個体の口縁部は、焼成前にひびわれが生じたため、それを両側からはさむように粘土でおさえて補修している。

体部破片はすべて外面に格子目タタキ、内面に円弧状文のあて板痕跡を残すもので、同一個体の破片である。多くのものは二次的に熱を受けており、焼台として使用されている可能性が強い。

5号窯上層からはこの他に器種のよくわからない特異な脚部が出土している(第8図1)。



第8図 5号窯出土須恵器実測図

端部は平坦で、安定している。内面上部は手持ちヘラケズリがなされており、その他にヘラ先があった痕跡が多く見られる。

### (3) 5号窯下層

#### 杯I (図版4-5 第8図3)

口径13.4cm、底径8.4cm、器高4.1cmである。焼成は良好で暗灰色を呈する。体部は内湾しながら立ちあがり、外上方にそのまま内湾しつつのびる。口縁部直下は強くロクロナデを加えたため、うすくなりややくびれて口縁部に至る。口縁部はやや器厚を増し、わずかに外反して丸く收まる。底部は丸底で、体部と底部の境界は明瞭ではない。器面は全体にロクロ調整されている。ロクロ調整の下に斜め上方に上がっていくシワ状の痕跡が観察され、ロクロ調整の前に巻き上げの段階が存在したことが知られる。口縁部には最終段階で特に仕上げのためのロクロナデが加えられている。底部は不定方向の手持ちヘラケズリに

よって再調整されており、ロクロからの切り離し技法は不明である。底部内面にはロクロ調整の後に不定方向のナデが加えられている。

#### 高台付杯Ⅰ（図版1-3 第8図4）

口径15.4cm、底径12.4cm、器高4.4cmで径9.8cm、高さ1.4cmの高台が付く。体部は底部よりわずかに屈曲して立ちあがり、単調に外上方にのびて口縁部に至る。口縁部は仕上げ調整のためにややすく丸く收まる。底部は丸底風で器壁はやや厚い。体部と底部の境界はロクロ調整の段階で作り出されているが、さほど明瞭ではない。高台は底部外周よりかなり内側に付着されている。やや強く外方にふんばっており、端部は左右にわずかにつまみ出されている。端面はわずかに丸味をおびている。器面は全体にロクロ調整されている。底部は回転ヘラケズリによって再調整され、その後に高台が付着されている。ロクロからの切り離しは回転ヘラケズリのためわからない。ロクロナデ痕跡が明瞭にみられる。

#### 高台付杯Ⅱ（第8図5）

底部から体部中程ぐらいまでの破片である。残存器高2.5cm、底径7.8cmで、径5.6cm、高さ0.8cmの高台が付く。焼成はやや不良で、青灰色のいわゆる須恵器色を呈する部分と灰白色を呈する部分がある。あるいは二次的な火を受けているのかも知れない。体部はゆるく立ちあがり、やや内湾しながらのびる。底部は平底である。体部と底部の境界は回転ヘラケズリによって作り出されている。高台は底部外周より約1cm内側に付着されている。高台はほぼ垂直に下方にのび、端部は丸く收められている。器面は全体にロクロ調整されている。底部は回転ヘラケズリの後に高台が付着されている。回転ヘラケズリは高台付着時のナデのためにわずかに痕跡が認められるにすぎない。底部内面にはロクロ調整の後にナデが加えられている。

#### 瓶（第8図6）

口頸部の小破片であるため、全形はわからない。器種は長頸瓶である可能性が強い。暗灰色を呈し、焼成は良好である。口径11.1cmである。頸部は単調に外反して口縁部に至る。口縁部は上にやや強く、下にわずかにつまみ出し、断面は三角形状を呈する。器面は内外面共にロクロ調整されている。

#### 甕（第8図2・7・8）

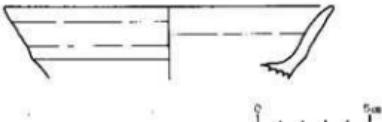
全形の分かるものはない。口縁部破片は3点出土している。2点は大甕で、1点はやや小型で頸部の短いものである。前者の波状文は3号窯、5号窯上層出土のものと同じである。後者は特に区画されることなく、2段の波状文が描かれている。波長は不均等である。口縁部、頸部の形態はいずれも同様で、頸部は単調に外反し、口縁部は上下につまみ出されて断面三角形状を呈する。体部破片は数点しか出土していない。いずれも外面に格

子目タタキ、内面に円弧状文のあて板痕跡を残すものである。

#### (4) 6号窯

##### 高台付杯III (第9図)

体部から口縁部までの破片であり、底部、高台の形態はわからない。焼成は良好で、外表面は黒灰色、内面は淡青灰色を呈する。口径14.6cm、底径11.2cmである。体部は内湾しながら立ちあがり、中程で反転してやや外反し



第9図 6号窯出土須恵器実測図

ながら口縁部に至る。口縁部は器厚を減じて丸く収まる。器面は全体にロクロ調整されている。体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリされており、底部全面に及ぶものと思われる。その上にわずかに高台付着のためのナデがみられる。

6号窯からはこの他に甕の体部破片が出土している。外面のタタキは平行線と格子目のものがある。内面のあて道具痕跡はすべて円弧状文である。

#### (5) 土 壤

3号窯上方で検出された土壤である。精査するには至らなかったが、遺物が多量に出土しているので、遺物についてのみ記述することとした。

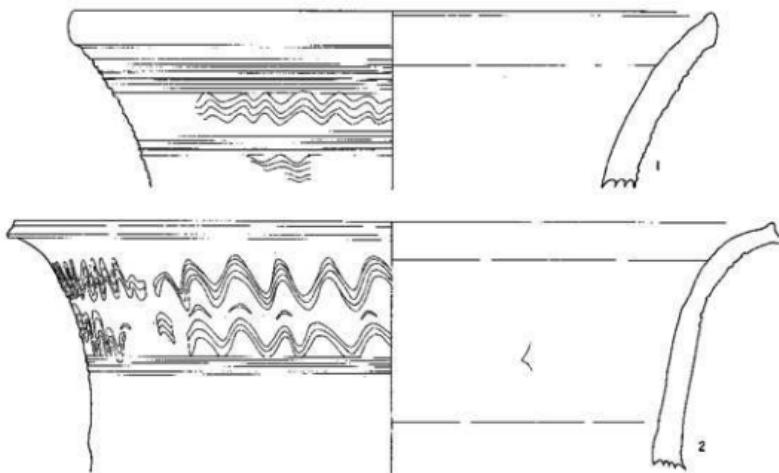
##### 甕I (第10図1)

口頸部の破片である。外面は黒灰色、内面は灰色を呈し、焼成は良好である。口径は33cm前後と思われる。頸部はゆるやかに外反し、口縁部に至る。口縁部はごくわずかに上方につまみ出され、丸く収まる。器面内外はロクロ調整されており、頸部外面には2段の平行沈線と波状文が描かれている。波状文は平行沈線の後に施文されている。波長はあまり均等ではなく、波の向きにも規則性は見られない。

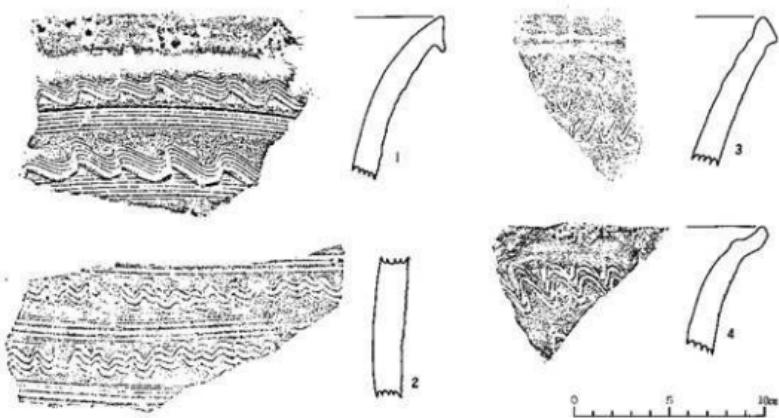
##### 甕II (図版4-1 第10図2)

体部以下が欠落している。焼成は良好で、黒灰色を呈する。口径は34.8cmである。頸部は直線的に外上方に立ちあがり、口縁部に近づくにつれて強く外反する。口縁部は上下につまみ出しており、口唇部くぼんでいる。口縁部直下には2段の波状文が描かれ、その下に3本の平行沈線がひかれる。施文は先に波状文、次に平行沈線の順である。波長はあまり均等ではなく、波の向きも様々である。部分的に、たて方向のナデによってすり消されている。また、しばしば施文具のとびが見られる。器面内外はロクロ調整されている。

この他のものもすべて甕の破片であり、頸部にはすべて波状文が描かれている。これら



第10圖 土壤出土變形圖



第11圖 土壤出土變形圖

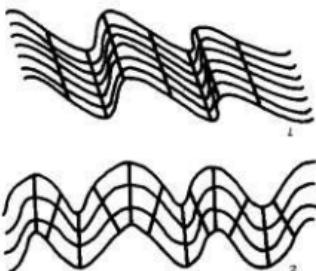
の波状文は以下のように分類される。

- a 5本前後からなる平行沈線によって数段に区画された中に1段ずつ描かれ、波長が均等で左側に波の頂部がかたよるもの(第11図1)。
- b aと同様だが、波長が不均等で、波の頂部の向きが一定方向ではないもの(第11図2)。
- c 口縁部と頸部中程の3本からなる平行沈線との間に2段描かれ、波長は不均等で波の頂部が一定の方向には向かないもの(第10図2)。
- d 沈線による区画がなく、波状文のみが数段描かれ、波長が均等ではないもの(第11図3・4)。

aは3号窓、5号窓上層、5号窓下層を通じて大勢をしめるものである(5号窓下層から1点d類が出土しているが、これはやや小型で頸部が短い器形のもので、各窓に伴う大型の甕はすべてaに属する)。施文はいずれも平行沈線の後に波状文をえがく。また波長が均等で波の頂部が左側にかたよることから、aはロクロによる回転力をを利用して施文されていることが知られる。施文に使用される櫛状の工具は鉛直線よりやや左に傾いた角度で器壁にあてられ、その角度にそって上下に動いており、波の上端、下端においても原則として流水文に見られるような回転運動はしていない(第12図1)。また長根A地点において観察されるロクロ回転方向はすべて右であることから推して、施文に使用されているロクロが右まわりであるとすると、回転力は一定と考えても良いから、櫛状工具は上には急速に、下にはゆっくりと動かされていることになる。aの口縁部はすべて上・下につまみ出されて、断面は三角形状を呈する。

bは表採品を除けばすべて土壙から出土している。甕Iはbに属するものである。施文は平行沈線、波状文の順である。波長の不均等さ、波の頂部の向が不統一であるところから、施文にあたって回転を利用しているとは思われるがロクロの回転力は利用していないと見られる。櫛状工具は波の上端では鉛直線に近い角度で器壁にあてられており、その前では櫛の上端は左から右に、下端は右から左に動いて櫛の角度が変化しながら施文されている。この櫛状工具の動きは土器を倒置して施文した場合でも同じである(第12図2)。なお、bに属するもので口縁部が観察できるものは甕Iの1点だけであった。

cは甕II唯1点しか出土していない。施文は先に2段の波状文、次に平行沈線の順であることはすでに述べた。波状文の施文手法は

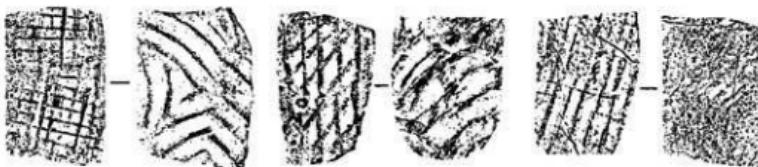


第12図 波状文模式図

bと同じである。

dは表採品と5号窯下層の1点を除けばすべて土壙から出土している。描き方は個体によって多様であり、規格性は感じられない。施文手法はbと同じである。口縁部形態も一定していない。dはさらに細分できるかもしれないが、量的な裏付けが乏しいため、ここでは一括して扱った。

体部破片に見られるタタキ目の多くは格子目のもので、その他に平行線、斜格子が見られる。あて板は大部分が円弧状文を刻んだものである。同一個体でタタキ板を少くとも4種類、あて板を2種類使用している特異なものも1点出土している。



第13図 壺破片拓影

註1 出辺昭三氏はこれを「仕上げナデ」と呼んでいる。出辺昭三「陶邑古窯址群」1966年37頁及び第6図

## V 考 察

### (1) 造構について

今回報告する3基の窯跡はいずれも所謂地下式の窯窓である。昭和46年8月に発掘調査し、既に報告しているA-1号窯とは互いに隣接し、一つの群を形成している。長根窯跡発見の端緒となった窯跡をA-1号と命名し、A地点ではそれから東するに従って2~6号と名づけた(2・4の両窯は先にも述べたとおり工事中に湮滅してしまったのである)。

ところで、先の報告ではA-1号窯を半地下水式の密窯とみなした。造構自体の保存状況はきわめて悪かったが、地形などから判断してその様に解釈したのである。しかし、今回A-1号窯の東に、1号とともに一つの群を形成する地下式の密窯が発見されたのである。こういった事実にもとづいて再考するならばA-1号窯を半地下水式と見なすのには、いさきかの無理が生じようかと思われる。ここでは、A-1号窯も他と同様、地下式密窯であったと推定しておきたい。

『長根窯跡群II』においては、発掘調査したA-1号窯、B-1号窯、C-1号窯のいずれもが、半地下水式密窯でしかも須恵器専用の窯であることに注目した。また同じ県北にありながら日の出山窯跡群、木戸窯跡群など多賀城創建の瓦を専ら焼成した窯は地下式密窯であるので、両者には大きな相違があることに着目したのである。

そして結論的に次のように述べている。「…宮城県北部地方の須恵器の生産に、半地下水式窯による専用生産と地下式窯による併用生産の2系統があったことを指摘しなければならない」(註1)。しかしながら、今回長根A地点の窯跡がすべて地下式であることが判明したのであり、そういった事実からすると、上述の見解は成り立たない。ここで前言を訂正しておきたい。

ところで、宮城県・福島県における8世紀初頭から前半にかけての窯跡の例として

- A. 大吉山窯跡 (古川市)
- B. 日の出山窯跡 (色麻村) (註2)
- C. 木戸窯跡 (田尻町) (註3)
- D. 長根窯跡 A地点 (涌谷町)
- E. 鳥屋窯跡 (大和町) (註4)
- F. 甲廣前窯跡 (仙台市) (註5)
- G. 峰窯跡 (亘理町) (註6)
- H. 大木戸窯跡 A地点 (福島県伊達郡国見町) (註7)
- I. 小倉寺高畠窯跡 (福島市) (註8)

- J. 蓬山窯跡 (郡山市) (註9)  
K. かに沢窯跡 (福島県西白河郡矢吹町) (註10)

などを挙げることができる。これらは、H大木戸窯跡A地点1・3号の両窯を除くとすべて地下式窯窯である。そして瓦と須恵器とともに焼成しているのは、A・B・C・G・J・Kの各窯であり、須恵器を専ら焼成しているのは、D・E・F・H・Iなどである。

このようにみてくると、8世紀前半の窯では須恵器専用の窯も、瓦と須恵器と共に焼成した窯も、その構造上の差異はないことがわかる。地下式窯窯であるということは、両者の差異としてではなくこの時期の窯のあり方の特徴としてとらえることができよう。ここで詳しく言及する余裕はないが、宮城県などでは8世紀後半以降、9・10世紀の窯は半地下式のものが圧倒的に多い事実も、このことの裏付けになろうかと思われる。

## (2) 出土遺物について

各窯出土の須恵器に大きなちがいは認められないので、ここでは一括してその特徴を概説し、年代的な位置付けをしたい。

まず、特徴的なものとして杯I、高台付杯Iがあげられる。杯Iは丸底で底部全面にわたって不定方向の手持ちヘラケズリで再調整されている。体部と底部の境界は明瞭ではない。口縁部直下を強くロクロナデすることによって口縁部を丸く作り出している。高台付杯Iは丸底風で、底部全体を回転ヘラケズリした後底部外周より内側にやや外方にふんばった高台が付く。体部と底部の境界はロクロ調整の段階で作り出されている。この他の杯あるいは高台付杯の底部もすべて回転ヘラケズリか手持ちヘラケズリによって再調整されている。壺について見れば、頸部にはすべて波状文が描かれており、特に大甕は各窯に伴うすべてのものがaの波状文を施している。体部のタタキは主として平行線と格子口である。平行線タタキでタタキ板の木目の方向がわかるものはすべて木目に対して直交している。まれには木目が強く浮き出して一見格子目タタキに見えるものがある。

以上各窯出土の須恵器の特徴を見てきたが、次にこれらの年代的位置について検討したい。

まず杯について見れば、杯Iは大きく再調整のあるグループに含まれる(註11)。このグループはこれまで再三指摘されているように8世紀前半から中葉の間に収まるものと理解される(註12)。また、丸底ないし丸底風の底部を持つ杯は福島県高畠窯跡、蓬山窯跡、宮城県日の出山窯跡群、鳥屋窯跡群(註13)などで出土しており、いずれも8世紀前半を下り得ない年代がかんがえられている。さらに長根A地点1号窯と比較してみると、杯I、高台付杯Iの形態、調整手法に基本的な共通点が見出される。これらのことから今回出土した須恵器は長根A-1号窯とほぼ同時期で、日の出山窯跡群、木戸窯跡群の時期までは

下らないと考えられる。長根A-1号窯の時期は陶邑古窯址群のT K217号窯、M T21号窯、藤原宮出土品、高畠窯跡との比較などから8世紀初頭と考えられている(註14)。従つて今回のA-3、5、6号窯出土品についても8世紀初頭近辺の時期と考えられる。

ところでA-1号窯出土須恵器はその器形、技法、さらには器種構成に至るまで畿内のものと見わけて近似し、地方色のめだたないものであることは先に指摘されている(註15)。これに対して今回出土した須恵器には、皿あるいは内面にケズリのある脚部など特殊なもののが存在、皿に典型的に見られる整形、再調整の粗雑さ、全般的なロクロ調整の甘さなどを指摘することができる。これらの点はA-1号窯には見られなかったところであり、地方的な色彩が強いものと言えよう。こういったA-1号窯の製品との相違は認められるが、年代的には大きなへだたりはないものと理解しておきたい。

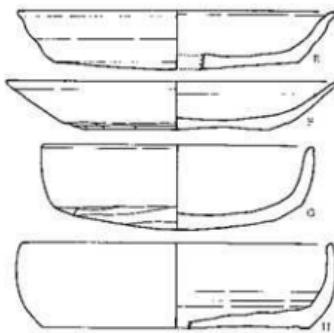
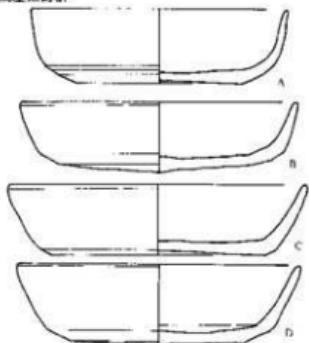
### (3) 長根窯跡群A地点の性格

ところで、長根窯跡群は1970年に発見されてから、これまで発掘調査、分布調査などによってその実態が明らかにされつつあり、その性格についても論じられてきた(註16)。ここではまず今回の成果を踏まえて出土須恵器の様相について検討し、次に供給関係を追求することによって長根窯跡群の性格を考えて見たい。

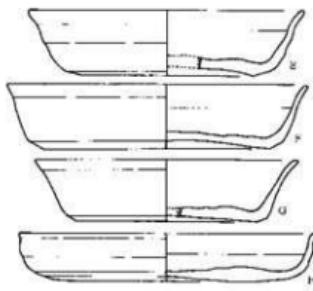
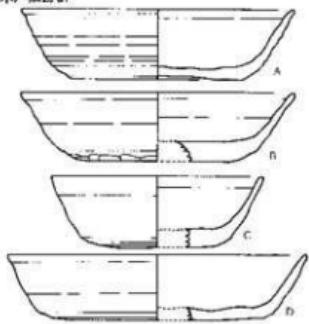
長根A地点の須恵器は2つに大別される。その一方は1号窯の製品であり、他方は今回出土した3・5・6号窯のものである。前者についてはすでに指摘されているように(註17)、畿内的な様相が容易に見出される。後者は地方的な色彩を持つものであることは先に述べた。このように同一地点、ほぼ同一時期の窯でこのように様相が異なるということは注目に値する現象と言わねばならない。このことはすなわち1号窯に対応する作り手と、3・5・6号窯に対応する作り手とは異なる人々であることを意味するであろう。言うならば前者は畿内的な様相を持つ熟達した人々であり、後者は未熟な、おそらくは在地の人々であったと思われる。つまり長根A地点においては一貫して畿内的な須恵器を高い製作技術をもって生産していたのではなく、高い製作技術を持つ工人を受け入れ、在地の未熟な人々をも工人集團に含みながら生産を継続し、発展させていったものと理解される。また、3・5・6号窯出土須恵器の地方的な様相、さらには8世紀後半に位置付けられているB地点の製品が同様に地方的であることなどから見て、長根窯跡群全体としてもかなり早い段階に地方的な様相を強めているようである。

次に供給関係を考えてみたい。そのためにはまず、ほぼ同時期である日の出山A地点、木戸、鳥屋の製品と長根A地点の製品との簡単な比較を試みる(第14図・表1)。第14図に示したように、杯について見れば明らかに各窯跡群ごとに固有の形が認められる。特に杯を大

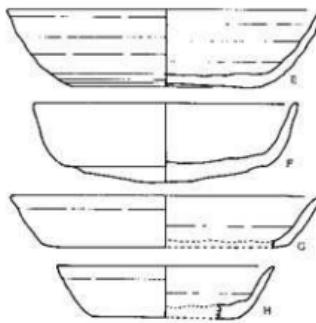
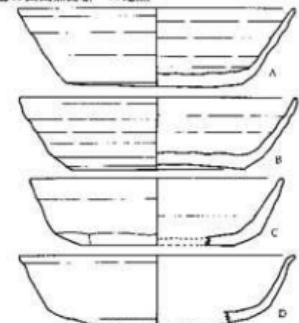
鳥屋窯跡群



木戸窯跡群



日の出山窯跡群 A 地点



長根窯跡群 A 地点



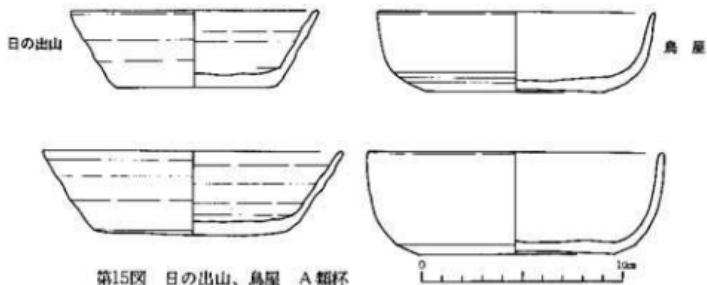
第14図 各窯出土の杯

0 5 10

	長根窯跡 A 地点	日の出山窯跡 A 地点	木戸窯跡	鳥屋窯跡
器種構成	杯・高台杯・蓋・皿・甕 短縦壺・長縦瓶・鉢(?)・盤	杯・高台杯・蓋・甕 長縦瓶・鉢・スリ鉢(?)	杯・高台杯・蓋・甕・短縦壺 長縦瓶(?)・鉢(?)・甕	杯・高台杯・蓋・甕・短縦壺 長縦瓶(?)・鉢・深鉢・甕・規
杯などのロクロからの切り離し	ヘラ切り	静止糸切り	ヘラ切り	ヘラ切り
作杯などの再調整	回転ヘラ削り 手持 "	手持ヘラ切り(1.7.8分) 回転 " (6分)	回転ヘラ削り 手持 "	回転ヘラ削り(1.2分) 手持 " (2分)
ロクロの回転方向	右	右	右・左	右
の 表 裏	平行線(木目に直交) 格子目	平行線(木目に斜交) 円錐状文	平行線(木目に直交) 円錐状文	平行線(木目に直交) 格子目
あて板文様	無文・円錐状文	無文・円錐状文(多量)	無文・平行線	無文・円弧文

表1 各窯杯・甕比較表

量に出土している鳥屋、日の出山 A 地点について見れば、特定の形のもの(鳥屋 A 類、日の出山 A 類)を大量かつ画一的に生産しており、大きさも數段階の規格によって明確に作り分けている(第15図)。このことは蓋、高台付杯などの小型品でも同じである(註18)。一方ロクロからの切り離し技法について見れば、長根 A 地点、木戸、鳥屋のいずれもがヘラ切りであるのに対して、日の出山 A 地点ではすべて静止糸切りであることが注目される。静止糸切りは宮城県内では今までのところ他に長根 G 地点(註19)、仙台市台の原窯跡群(註20)から各一点表面採集されており、地域的あるいは時間的に若干の広がりは持つようであるが、全体の中ではさほど大きな位置は占めていないと言って良い。再調整技法について見ればいずれの窯跡群でも回転ヘラケズリ、手持ヘラケズリの 2 種類が共に使われている。中でも日の出山 A 地点 A 類に見られる底部の円に対して弦の形に数回に分けて削り、底部中央を削り残すという手法は宮城県内で今まで知られている他窯の製品には見られず、独特なものと言えよう。ところでこれらの再調整技法は無規則に用いられるもので

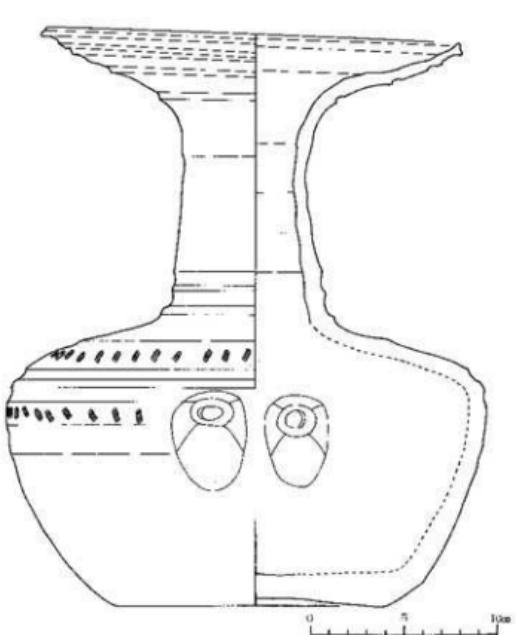


第15図 日の出山、鳥屋 A 類杯

はない。例えば、鳥屋 A類はすべて回転ヘラケズリで再調整されており、手持ちヘラケズリが用いられないことはない。また日の出山 A地点 1・7・8号窯出土の A類はすべて先に述べた独特な手法による手持ちヘラケズリで再調整されている(註21)。すなわち用いられる再調整技法は各窯の各器形ごとに定まっているのである。また、再調整される位置も若干の例外はあるにしてもおおよそ定まっているようである。同様のことを大きさなどの他の要素についても指摘することができる。つまり各窯跡群では各々獨得の形態が採用されており、それに伴う再調整その他の要素には規則性が明確に認められるのである。従って各窯跡群の製品を識別することはある程度可能と言うことができる。このような状況は杯に限らず、高台付杯、蓋などの小型品の場合には普遍的に見られる。そこで、これらのことと踏まえて宮城県北部地域出土の須恵器のなかから長根 A地点の製品の検出を試みた。その結果、遠田郡涌谷町追戸 B・C 地区横穴群から出土している蓋 I類およびそれとセットになる高台付杯 I, II類(註22)が長根 A地点の製品と推定された。また、三本木地区には日の出山 A地点、木戸の製品は多く見られるが長根 A地点のものは確認されていない。つまり現時点では長根 A地点の製品は追戸横穴群にのみ集中しており、その供給先はあまり大きくなき範囲に限定できそうである(註23)。

以上述べてきたことをもとにして長根 A地点の性格について考えてみたい。これまで長根 A地点の特徴として最も強調されてきたのは出土須恵器の畿内的な様相であった。一方では東北地方の窯業生産は城柵の設置に伴って開始されるという考え方がある(註24)、長根窯跡群の成立と小山郡の建設とが結びつけて考えられてきた(註25)。しかしながら先に述べたように長根 A地点において急速に畿内の様相が失われ地方色が強くなっていくことが今回の調査により判明した。また宮城県内の古墳あるいは横穴から出土している古墳時代末期の須恵器の中には畿内あるいは東海地方のものと比較して船形が地方的なものに変形されていることから現地産と見られるものがある(第16図・註26)。このことは須恵器の生産体制は必ずしも多賀城などの城柵に伴うものではないことを示している。さらに長根 A地点の須恵器は追戸 B・C 地区横穴群から集中的に出土していることを考えあわせれば、長根 A地点と追戸 B・C 地区横穴群の营造集團との間に強い関係のあることが推定される。この関係の具体的な姿をあえて想定すれば、長根 A地点の経営に追戸 B・C 地区横穴群の营造集團に含まれている人々が直接関与しているということであろうか。この点に関しては資料の量的な制約も伴い、十分に検証できたとは考えていないが、現在までの資料から考え得る可能性として提起しておきたい。なお、長根 A地点と追戸横穴群の地理的な近さも傍証となり得ると思われる。さらに陸奥国の官窯と見られ、瓦と須恵器を併焼する木戸、日の出山 A地点とはちがって長根窯跡群が須恵器のみを生産している点もこのよ

うに考えると容易に理解されるのではないだろうか。



第16図 川北横穴出土窯跡実測図

### 追記

最近長根窯跡群の展開に関する渡辺泰伸氏が新しい見解を呈示された(註27)。ここで渡辺氏の新見解について若干言及しておきたい。渡辺氏は「分布上で共通することは瓦を主として焼成した窯跡群に近接して必ず須恵器を専門に焼成した窯跡群が見られる」とし、このような関係を木戸窯跡群と長根窯跡群、日の出山窯跡群と鳥屋窯跡群との間に考えている。そしてこの状況を「須恵器を専門に焼成していた窯跡群があり、後に瓦を多量に焼成する必要

が生まれ、今までに比べる

とはるかに多量の製品を生産するために窯跡の位置を移動したもの」と解釈し、傍証として立地条件の変化、出土遺物をあげている。

私はこの見解には次のような点から従い難い。第1に10km以上の距離を持ち、中間に窯跡群としての連続の見られない2つの窯跡群の存在が窯跡群の移動という現象を考える積極的な根拠になり得るとは考え難い。第2に渡辺氏は出土遺物からも裏付けられるとしているが、先に述べたように、木戸窯跡群と長根窯跡群、日の出山窯跡群と鳥屋窯跡群の各々の須恵器は異なっており、同一工人集団による製品とは考え難い。このことは鳥屋窯跡群と日の出山窯跡群とのロクロよりの切り離し技法、再調整技法の違いに顕著にあらわれている。本来的には、このような問題を考える方法として第1に出土遺物の詳細な分析、窯跡群としての継続の中に見られる画期の検討などがあげられ、地理的な近接などは傍証の域を出ないと思われるるのである。

本報告を成すにあたって、岡田茂弘・佐々木茂樹・工藤雅樹の各氏には種々有益な御教示をたまわった。また氏家和典氏からは、氏が調査を担当された、岩出山町川北横穴出上の双口廻（第16図）の掲載にあたって、特別の御配慮をたまわった。

発見遺構の挿図として用いた図については現在、東京都文化課におられる古泉弘氏が整理されたものを用いた。

いつものことながら、調査にあたっては、町当局、地主、地域住民各位、さらに、宮城県多賀城跡調査研究所の同僚諸氏の絶大な御協力があった。

末筆ではあるが以上の方々に心からの謝意を表したい。

註1 II調査経過註2と同じ

註2 岡田茂弘・工藤・桑原・佐々木・進藤「日の出山窯跡群」宮城県文化財調査報告書 第22集 宮城県教育委員会、昭和45年3月

註3 「宮城県文化財発掘調査略報」宮城県文化財調査報告書第40集 宮城県教育委員会 昭和49年度一般開発関係遺跡(4)木戸瓦窯跡1975年3月

註4 東北学院大学考古学研究部「鳥屋窯跡群三角田南地」発掘調査報告」温故第9号 1975年3月

註5 渡辺泰伸・結城慎一・川村正・木村浩二「陸奥国官窯跡群」所収「庚申前窯跡概報」 古窯跡研究会 1973. 3

註6 「宮城県考古資料展解説」宮城県教育委員会 1973. 7

註7 工藤雅樹・桑原滋郎・進藤秋輝・高野芳宏「大木戸窯跡群第一次調査報告」『刈見町の文化財』1974. 3

註8 工藤雅樹「福島市小倉寺高畠遺跡発掘調査報告」『福島市の文化財、福島市文化財調査報告書第7集』福島市教育委員会、昭和49年

註9 梅宮茂「郡山市龍山窯跡調査報告」『福島県文化財調査報告書第8集・福島県埋蔵文化財調査報告書』福島県教育委員会

註10 永山倉造「かに沢窯跡」『福島考古学年報3 1973年』福島考古学会 1974年3月

註11 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要1』宮城県多賀城跡調査研究所 1974年3月

註12 註7・註11と同じ。

ほかに進藤秋輝・平川南・佐々間豊・辻秀人「桃生城跡1」宮城県多賀城跡調査研究所 1974. 3

註13 註4と同じ。

なお、報告者は杯をA・Bの2者に分け、Aを高畠窯跡と併行関係、Bを日の出山窯

跡群と併行関係にあるとして、鳥屋窯跡群に8世紀前半から中葉の年代を与えていた。しかしこの見解には若干の誤解があるようと思われる。高畠窯跡については報告書では8世紀前半としているが、後に報告者である工藤氏は桑原氏と共に8世紀初頭という年代を示している。「(東北地方における古代土器生産の展開」1972年2月)一方日の出山窯跡群は多賀城創建に伴うものと考えられており、その年代は730年代近辺と考えられる。従って鳥屋窯跡群と日の出山窯跡群・高畠窯跡との併行関係が考えられるとすればその年代は8世紀初頭から前半とすべきであると思われる。このことはかえりのある蓋の存在からもうなづかれるところと思う。

註14 「長根窯跡」および「長根窯跡群 II」

註15 註14と同じ

註16 註14と同じ

註17 註14と同じ

註18 これらの点については、近い将来に詳細な分析結果を公表したい。

註19 II調査経過註2と同じ。

註20 加藤孝・野崎準「台の原・小田原窯跡群の古窯分布とその問題点」『東北学院大学東北文化研究所紀要第1号』1972年

註21 第14図に示した分類は器形のみによって分けたものである。

註22 佐々木茂樹「追戸・中野横穴群」涌谷町教育委員会 1973年3月 22~23頁, 34頁  
第11図 第17図

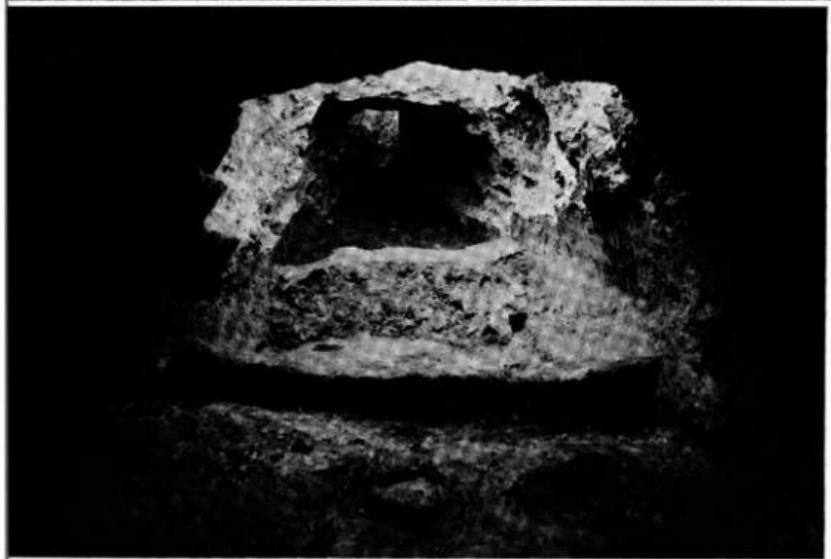
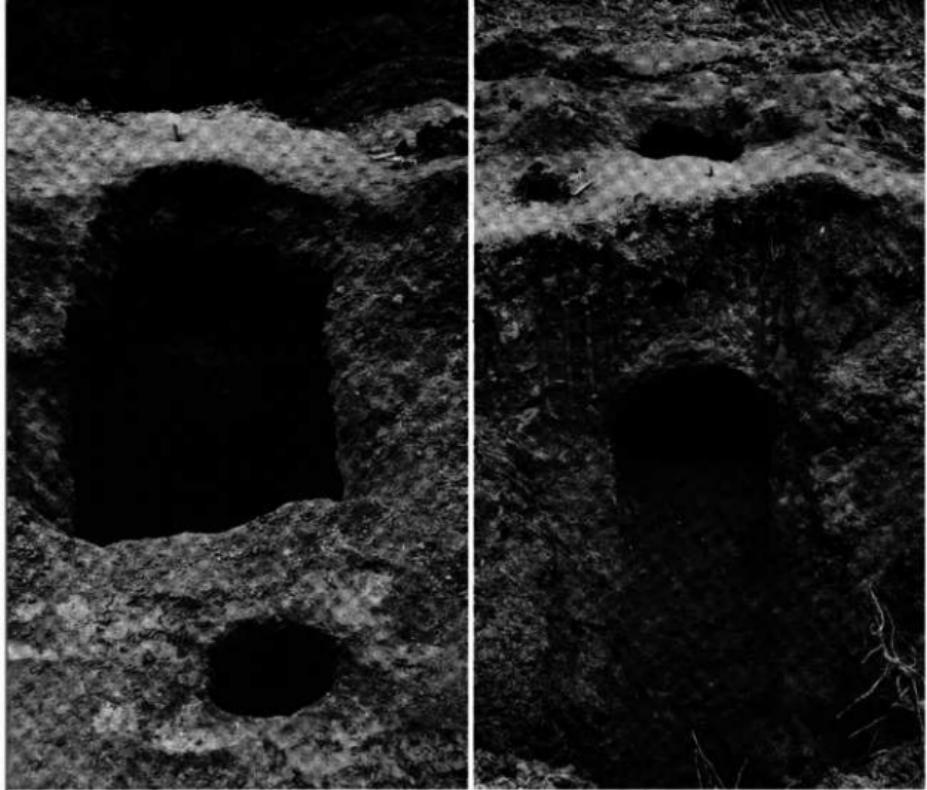
註23 先に長根A地点の製品である可能性が指摘されていた岩沼市長谷寺横穴出土の長頸瓶は桑原滋郎氏と共に再検討した結果長根A地点の製品ではないとの結論に達した。

註24 倉田芳郎・坂詔秀一「東北・関東」『日本の考古学 VI』河出書房1968年7月

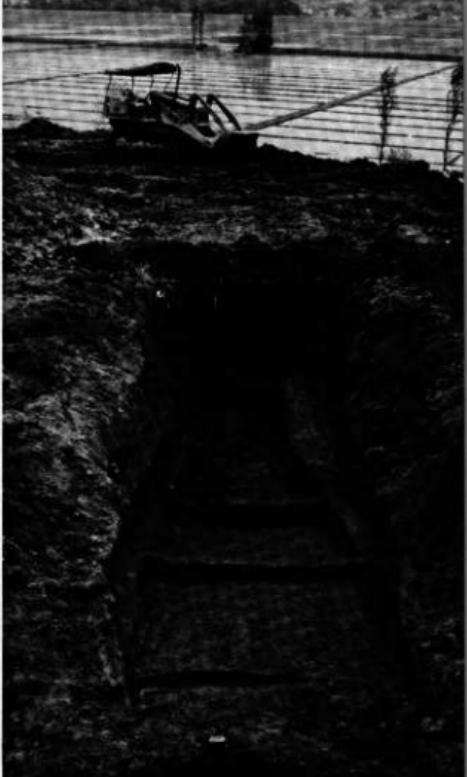
註25 註14と同じ

註26 この点に関しては氏家和典氏が別の視点からすでに同様の見解を示している。氏家和典「東北横穴の問題」「日本考古学・古代史論集」伊東信雄教授還暦記念会編, 吉川弘文館 1974・2

註27 渡辺泰伸「陸奥国官窯群 II」山窯跡研究会 1976年5月

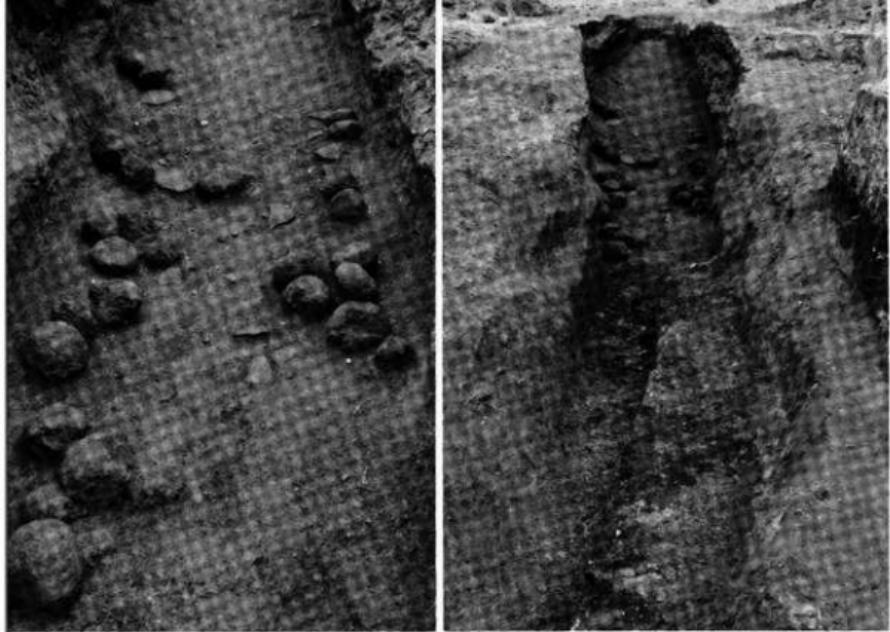
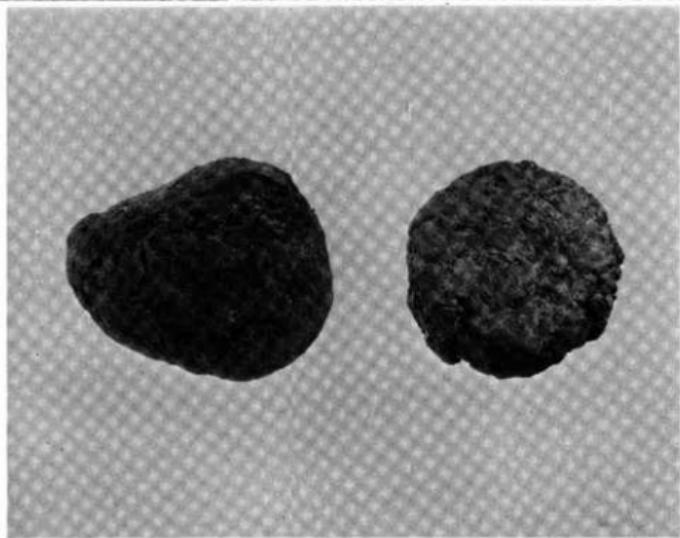


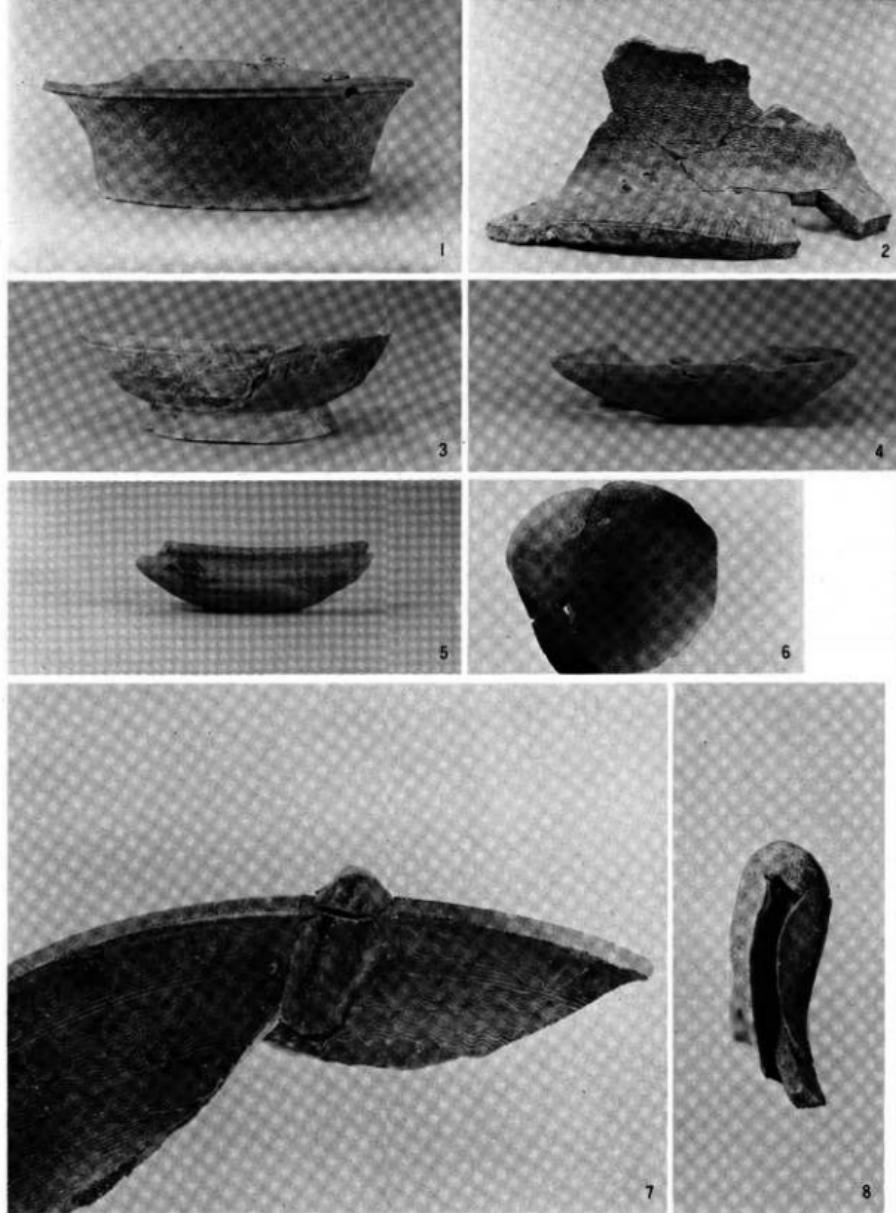
図版1 A地点 3号窯 上右 前方より 上左 煙道より 下 内部



図版2 上 A地点5号窓 左 前方より 右 上方より  
下 A地点6号窓

図版3  
A地点 6号窯  
上右 全景  
上左 内部  
下 焼台





圖版4 A地點3·5·6號窯出土須器

1·2 頸頸部  
3 高台付杯  
4 壺  
5 杯  
6 艋體部叩目  
7·8 頸頸部補修

昭和51年3月20日印刷  
昭和51年3月31日発行

発行者 涵谷町教育委員会  
宮城県遠田郡  
涵谷町字新町裏153の2  
印刷者 (株) 東北プリント

